横穴式石室からみた下毛野南西部の社会関係
―伯仲１号墳を中心に―

荒井啓汰[1]

はじめに
1　伯仲１号墳の横穴式石室をめぐる状況
(1) 伯仲１号墳の横穴式石室とその類例
(2) 伯仲１号墳と永宝寺古墳の共通性
2　横穴式石室からみた伯仲１号墳の社会的位置付け
(1) 伯仲１号墳と永野川流域の横穴式石室
(2) 足利地域との比較検討
おわりに

主に６世紀後葉から７世紀前葉の横穴式石室を検討対象として、栃木市伯仲１号墳を中心とした栃木県南西部地域の社会関係を考える。伯仲１号墳は山石を使用する無袖有段構造石室であるが、無袖無段構造の可能性も残る。本稿では石室の伝播や系譜よりも、地域内における石室の共通性や差異性に目を向け、その社会的状況を追及する。

伯仲１号墳と、渡良瀬川南岸の足利市永宝寺古墳の石室は、平面長方形で胴張のない直線的形状で、玄室の法量も近似する。無袖で、複数石材の框石を有し、玄室に向かって一段下がる。奥壁は大型鏡石の上に小型石材、側壁一段目に比較的大型の石材を横位に用い、持ち送りが比較的弱い。チャートを中心に山石を用い、石室構築過程も共通性がある。復元長 57m の伯仲１号墳と長 66m の永宝寺古墳は規模も近く、埴輪をもち、６世紀後葉（TK43 型式併行期）の築造が想定される。横穴式石室・墳丘規模・時期・副葬品から、両者は類似の社会的・階層的位置にある。

伯仲１号墳の無袖有段構造石室は、周辺地域の永野川流域の立柱石を伴う疑似袖の横穴式石室や、無段無袖石室とは異質で、立地・群構造からも位置付けが異なる。また、両袖石室や胴張形無袖石室が主体となる足利地域における永宝寺古墳の位置付けもやや異質で、立地や階層構造も異なる。このように足利地域における永宝寺古墳と、永野川流域における伯仲１号墳は、類似した社会状況が考えられる。ただし、足尾山塊の山石を使用するので、無関係ではない。伯仲１号墳は、永野川流域の大平・皆川地域と関係をもちつつもそれとは異なる社会・政治組織で、足利地域における永宝寺古墳と同様のポジションにあったと想定できる。

はじめに

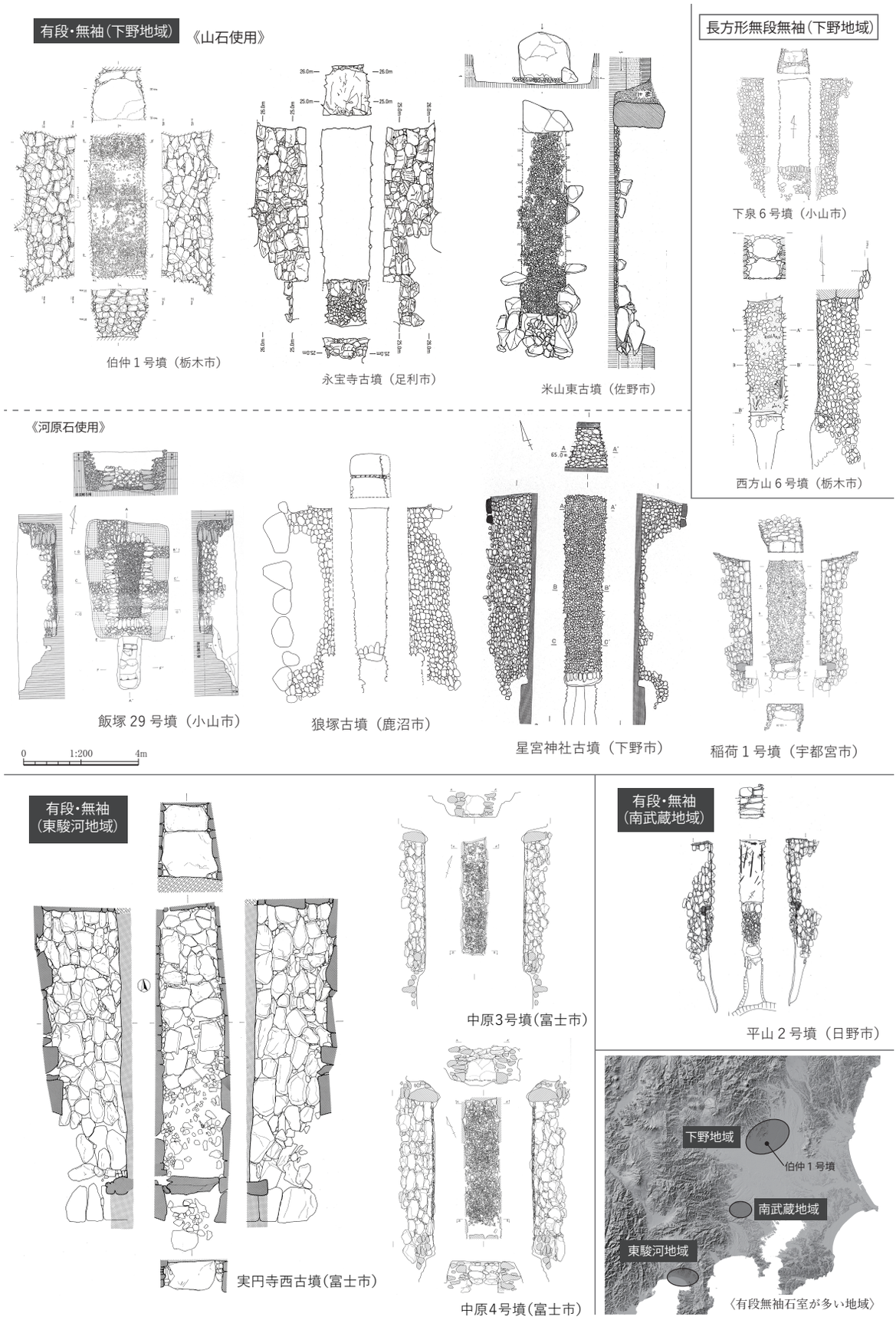
栃木市伯仲１号墳は、永野川西岸の低台地上に位置する復元長 57m の前方後円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、内部から多数の副葬品が出土した。埴輪や馬具、鉄鏃などの編年的位置から、６世紀後葉（TK43 型式併行期）の築造が想定される（栃木県古墳勉強会 2018・2019）。伯仲１号墳は当該期の首長墓と目され、その社会的・政治的位置付けが注目される。本稿では、主に６世紀後葉から７世紀前葉の横穴式石室を検討対象として、伯仲１号墳を中心とした下毛野南西部地域の社会関係を考えていきたい。

１　伯仲１号墳の横穴式石室をめぐる状況

（１）伯仲１号墳の横穴式石室とその類例

伯仲１号墳の横穴式石室は、玄室長 5.0m、同幅 1.8m、同高 1.8m の無袖石室である。石材は山石を用い、チャートの割石や「岩舟石」を使用している。玄室平面形は長方形で、奥壁は大型の鏡石の上に小型の石材を用いる。玄門部は閉塞石の存在により明確になっていないが、無袖であることが確認できる。また、塊石

(1)　筑波大学大学院



第１図　伯仲１号墳の横穴式石室とその類例

による閉塞石が框石上[1]になされていることが注目される。羨道から玄室へと一段下がる構造の無袖有段構造石室は、短い羨道部を充填するように段の部分で塊石を用いて閉塞することが多いので、伯仲１号墳も無袖有段構造石室である可能性が高い。

無袖有段構造石室（市橋 2010）は、平面形は無袖で、入口部に框石を伴って段を有する一群である（第１図）。基本的に地下式で羨道部が短い。この一群は下毛野地域において多くみられ、「星の宮神社型」（小森・中村 1989）や「飯塚型」（大橋 1990）などと呼称される事例がこれにあたる。系譜関係としては、広くは「竪穴系横口式石室」の流れの中で位置づける見解がある（池上 1988）。また、これらの無袖有段構造石室は、基本的に河原石小口積みによるものであるが、山石を使用するものもあり（市橋 2010）、伯仲１号墳は後者として理解される。当該地域の無袖有段構造石室としては小山市飯塚 29 号墳の横穴式石室が最も古く、６世紀前葉から中葉には導入されている。以降、飯塚古墳群を中心に展開し、周辺地域の石室へと影響を与える。

東日本に目を向けると、無袖有段構造石室は南武蔵地域および東駿河地域に分布している（藤村 2016）。特に、富士山・愛鷹山麓の東駿河地域では、６世紀後半以降に首長墓から群集墳に至るまで無袖有段構造石室が採用される地域である。市橋一郎は、下毛野地域の山石を使用する無袖有段構造石室について、東駿河地域との関係性を示唆している（市橋 2010）。

一方で、伯仲１号墳の石室が無袖無段構造である可能性も残る。近辺の長方形玄室・無袖無段構造石室の事例をみると、小山市下泉６号墳や栃木市西方山６号墳などが存在する。ただし、伯仲１号墳の石室と玄室平面形・玄室規模・石材・用石技法が共通する石室は意外と少ない。当該地域において無袖有段構造石室の多くが狭長な河原石積み石室であり、無袖無段構造石室も法量や規模の面で不一致である。後述するように、唯一、足利市永宝寺古墳の石室は平面形・玄室規模・石材・用石技法などが類似する。

このような状況の中で、伯仲１号墳の山石を用いた無袖石室が、下毛野南部地域に前段階から存在していた河原石積みの無袖有段構造石室に由来するのか、それとも東駿河地域など他地域との情報共有を想定するのかは、現状では判断しかねる。河原石積みの無袖有段構造石室や東駿河地域の石室と「他人の空似」である可能性を捨てきれない以上、伯仲１号墳の石室系譜を絞ることは得策でない。必ずしも石室の伝播や系譜の追求といった側面に終始するのではなく、むしろ地域内における石室の共通性や差異性に目を向けることで、その横穴式石室が採用されるに至った社会的状況を追及することができると考える。

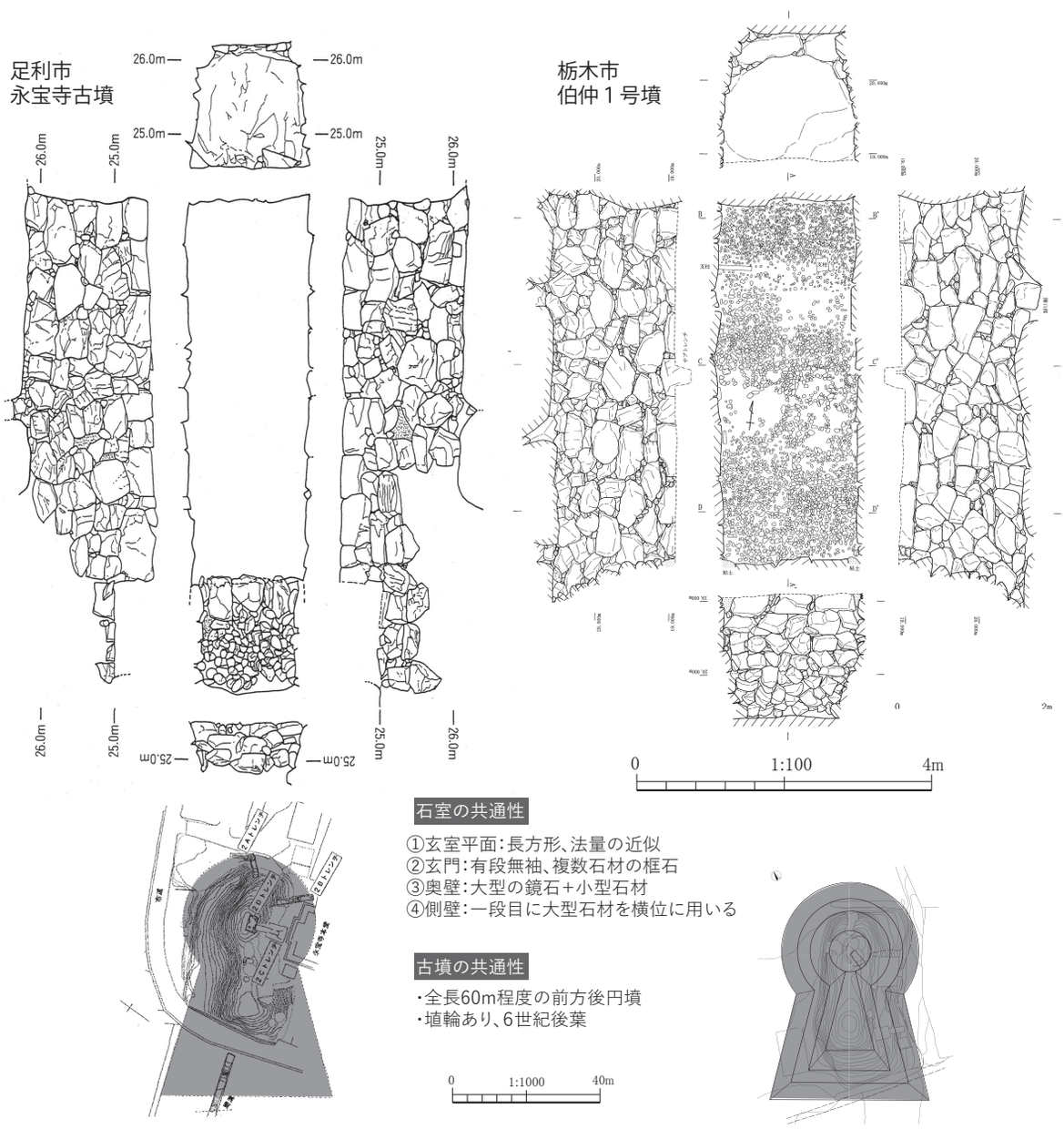
（２）伯仲１号墳と永宝寺古墳の共通性

伯仲１号墳の横穴式石室は巨視的には無袖有段構造石室として位置付けられることを指摘したが、ここで注目したいのは、伯仲１号墳の横穴式石室が、足利市永宝寺古墳の石室と類似している点である（第２図）。永宝寺古墳は、渡良瀬川南岸に位置する全長 66m の前方後円墳である（足利市教育委員会 2004）。埴輪をもち、周溝からは須恵器大甕片も出土している。伯仲１号墳の石室と永宝寺古墳の石室を比較すると、以下の共通性が認められる。①玄室平面形は長方形で、胴張を呈さない直線的な形状である。また、玄室の法量も近似する。②玄門部は無袖で、框石を有し、玄室に向かって一段下がる構造をしている。また、框石は複数の石材を用いている。③奥壁は大型の鏡石を用い、その上部に小型の石材をかませている。④側壁では、一段目に比較的大型の石材を横位に用いている。また、持ち送りが比較的弱い。⑤石材はチャートを中心に山石を用いている。

これらの要素の共通性は、想定される石室構築過程からも追認できる。伯仲１号墳では、石室の目地の検討から、奥壁を据える→側壁最下段および框石を据える→奥壁鏡石の高さまで側壁を構築する→奥壁鏡石上

の石材を置き、それに合わせて残りの側壁を構築する、といった流れが想定されている。永宝寺古墳の横穴式石室も同様の石室構築過程を推測できる。このように、伯仲 1 号墳と永宝寺古墳の石室の類似は、イメージされた石室の空間形状（長方形玄室の無袖有段構造石室）と、それに至るまでの構築過程を同じくすることに起因していると言える。

興味深いのは、両者が墳丘規模と時期も近い点である。伯仲 1 号墳は復元全長 57m の前方後円墳と想定され、永宝寺古墳は全長 66m の前方後円墳である。両者ともに埴輪をもち、出土遺物の様相から 6 世紀後葉（TK43 型式併行期）の築造が想定される。さらに、副葬品としては馬具や弓金具を有し、比較的上位の階層に位置付けられる。横穴式石室だけでなく、墳丘規模・築造時期・副葬品の内容が近しい点からは、両者が類似の社会的・階層的位置付けにあったと言える。



第２図　伯仲１号墳と永宝寺古墳の共通性

2　横穴式石室からみた伯仲１号墳の社会的位置付け

（1）伯仲１号墳と永野川流域の横穴式石室

次に、周辺地域、特に永野川流域の横穴式石室との関係性の中で、伯仲１号墳を位置付けてみたい。永野川・赤津川流域の古墳群は、北から順に「西方地域群」「皆川地域群」「大平地域群」の３つのまとまりで把握される（秋元 2016）。横穴式石室の基本的な変化としては、平面形は長方形から胴張形へ、奥壁は小型石材を積み上げるものから鏡石を用いるものへという方向性がうかがえる（秋元 2006）。大平地域群および皆川地域群では、奥壁は小型の石材を積み上げるものが先行するが、一定の大きさを積み上げるものと、鏡石を用いるものは必ずしも時期差ではないこと、天井石については石材の大型化とそれに伴う数の減少が認められることなどが指摘されている（小森 2012）。これをふまえて、秋元陽光によってⅠ～Ⅲ段階が設定されている（秋元 2016）。

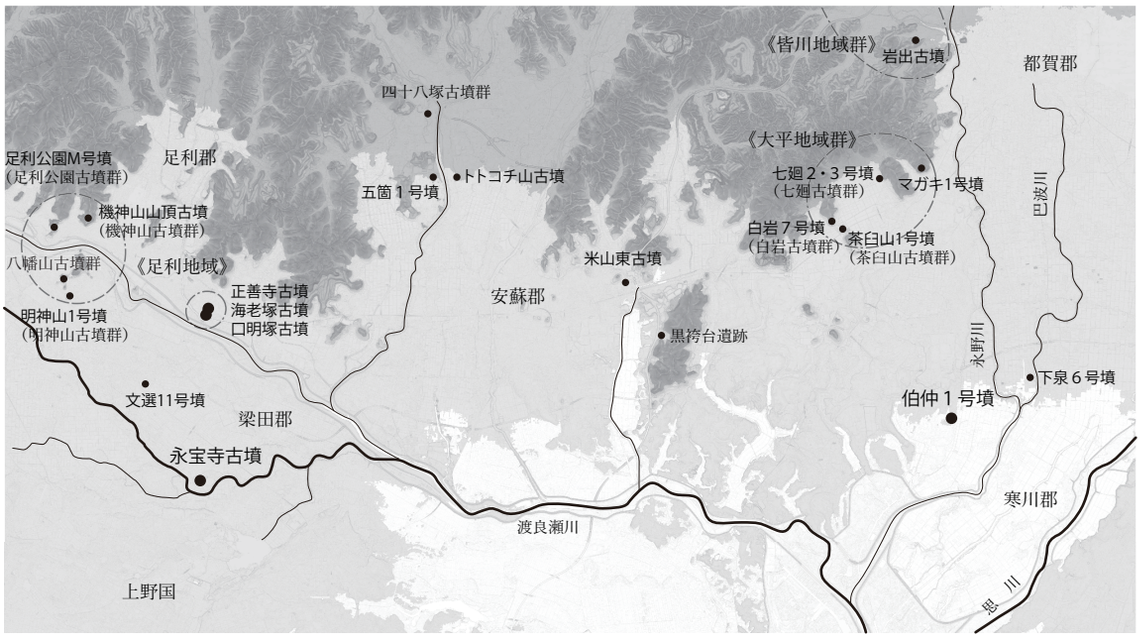
大平・皆川地域群における６世紀後半の横穴式石室（秋元によるⅡ段階）は、平面形態は多様であるが、いずれも長方形玄室である。玄室平面規模の大きい石室についてはいずれも有袖の石室であり、立柱石を伴う疑似両袖が顕著に認められる（マガキ１号墳・茶臼山１号墳・岩出古墳）。また、天井石から遊離する楣石がみられることも特徴的である。一方で、６世紀後半の無袖石室は狭長な無段無袖構造石室である（七廻２・３号墳）。墳丘規模と石室規模を鑑みれば、相対的には有袖（疑似袖）石室を上位に、無段無袖石室を下位に位置付けることができる。西方山地域群の西方山古墳群では、基本的に無袖無段構造の石室で[(2)]、６世紀末葉から７世紀初頭に位置付けられる１号墳や３号墳は胴張り化の傾向がうかがえる。

このようにみたとき、伯仲１号墳の無袖有段構造石室が、当該地域の横穴式石室の系統の中に必ずしも乗ってこないことがわかる（第３図）。立柱石を伴う疑似袖の横穴式石室と、無袖有段構造石室は空間形状として異質であり、同じ永野川流域にありながら、その基本的な形態が異なっている。また、七廻２・３号墳や西方山古墳群の無段無袖石室とは、法量・平面形・石材などの点がそれぞれ異なり、こちらも伯仲１号墳との密接な関係を見出しがたい。

これは古墳の立地の側面からも追認できる。すなわち、伯仲１号墳は太平地域群とは直線距離で約 6km、皆川地域群とは約 10km 離れており、同じ永野川流域であるが、同一の地域群として括ることがためらわれる。また、大平地域群では小荷田古墳群や白岩古墳群、皆川地域群では岩出古墳群や愛宕山古墳群などの群集墳が認められる一方で（秋元 2016）、伯仲１号墳は明確な群集墳を伴わず、単独墳的な立地となっている。このように、石室構造・立地・群構造の相違などから、太平地域群や皆川地域群とは異なる位置付けを模索する必要がある。

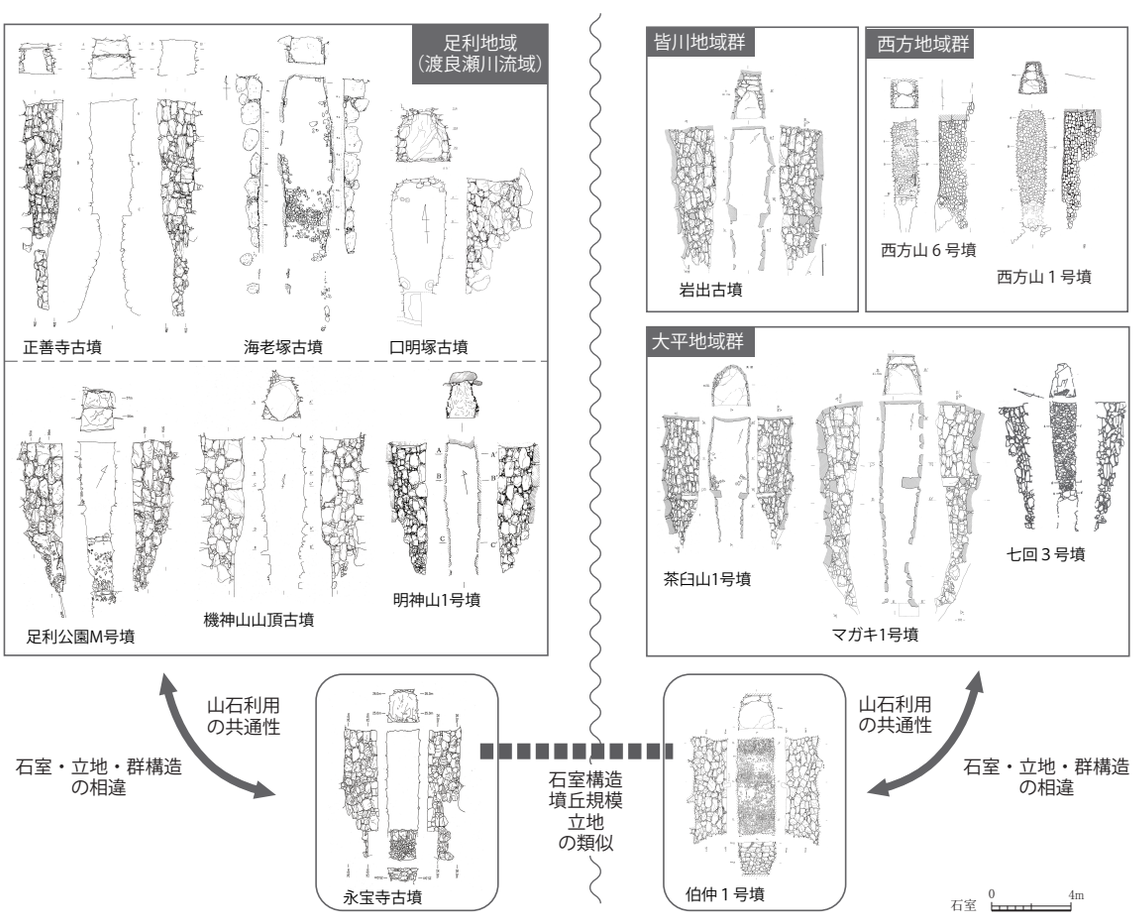
（2）足利地域との比較検討

続いて、足利地域における永宝寺古墳の位置付けを考える。足利地域では渡良瀬川北岸の常見古墳群で首長墓が展開し、６世紀後半から７世紀初頭の間に、両袖で平面長方形の正善寺古墳（前方後円墳・103m）から、無袖で胴張形の海老塚古墳（円墳・50m）、さらに両袖で胴張形の口明塚古墳（円墳・47m）への変遷が指摘されている（市橋 2014 など）。小型古墳の様相は複雑であるが、両袖で長方形玄室のものとしては小首長墓で足利公園 M 号墳、小型古墳で行基平１号墳などがあり、無袖で緩やかな胴張形を呈するものとしては小首長墓で機神山山頂古墳、小型古墳で明神山１号墳などがある。足利地域では６世紀後葉の比較的早い段階から胴張形が採用されていることも指摘されているが（齋藤・中村 1992）、栃木県域全体の傾向で捉えれば、おおむね６世紀末葉以降に胴張り化の傾向が見て取れ（中村 2003 など）、大枠ではその例に漏れない。



※６世紀後半～７世紀初頭の主な横穴式石室墳を示し、すべての石室を表示しているわけではない。括弧付きの明朝体は群集墳、大きい黒丸は首長墓を示す。

0　10km



第３図　伯仲１号墳と永宝寺古墳をめぐる諸関係

さて、足利地域では両袖石室や胴張形を呈する無袖石室などが主体となる様相がうかがえるが、無袖有段構造の永宝寺古墳はやや異質である。首長墓の正善寺古墳や海老塚古墳とは、その様相が大きく異なっていることがわかる。

さらに、立地や階層構造の相違もみられる。渡良瀬川流域には古墳が密集しているが、永宝寺古墳はこの地域とは約4.8km離れている。渡良瀬川流域では首長墓群である常見古墳群や、群集墳である足利公園古墳群・明神山古墳群・機神山古墳群・八幡山古墳群などが展開し、重層的な社会構造を見せているが、永宝寺古墳の周囲には大規模な群集墳や後続する首長墓などが見当たらず、独立墳的な状況を呈している。このように、永宝寺古墳は、石室構造・立地・群構造の相違などから、渡良瀬川流域とは異なる社会的位置にあったものと思われる（第３図）。

このような視点で見たとき、足利地域における永宝寺古墳の位置付けと、永野川流域における伯仲１号墳の位置付けが構造的に類似していることに気づく（第３図）。永宝寺古墳と伯仲１号墳は、いずれも主たる古墳の密集域から外れて独立墳的な様相を呈し、横穴式石室の構造もそれぞれの地域群のものと異なっていた。この両者の横穴式石室が極めて類似し、階層的にも同様に位置付けられるのであるから、ここに共通した社会構造を指摘できよう[(3)]。

ただし、伯仲１号墳も永宝寺古墳も足尾山塊の山石を使用していることから、前者は大平・皆川地域と、後者は渡良瀬川流域と無関係ではありえない。伯仲１号墳は、大平・皆川地域と関係をもちつつもそれとは異なる社会・政治組織であり、かつ足利地域における永宝寺古墳と同様のポジションにあったと想定できる。

おわりに

伯仲１号墳の横穴式石室の位置付けとして、①巨視的には無袖有段構造石室の可能性が高いこと、②伯仲１号墳と永宝寺古墳と横穴式石室の構造が共通し、同じ社会的・階層的位置付けが想定されることを指摘した。続いて地域内部の横穴式石室の比較から、③伯仲１号墳の石室は、大平地域群や皆川地域群とは横穴式石室や立地の様相を異にすること、④永宝寺古墳もまた渡良瀬川北岸域の古墳と石室や立地の様相を違えることを指摘した。以上の検討から、伯仲１号墳と永宝寺古墳の被葬者が、極めて緊密な情報共有をおこなっていたこと、６世紀後葉における同一の社会的役割を担っていたことなどを推察した。

今後の課題としては、まず、その具体的な社会関係について検討が及ばなかった点が挙げられる。予察的に述べるのであれば、伯仲１号墳と永宝寺古墳はいずれも渡良瀬川を中心とした低地面を意識している。また、両者の北側にはのちの東山道が通る立地も共通する。これらの立地からは、内水面交通と陸上交通の結節点としての役割が想定され、そのような交通体系のもたらす緊密な情報共有システムが、類似した横穴式石室を構築する背景になったのかもしれない[(4)]。また、本稿では周辺地域の多くの石室についてはその位置づけが不明瞭なままとなった。特に、永宝寺古墳と足利市文選11号墳（無袖有段構造石室）や、伯仲１号墳と飯塚古墳群および牧ノ内古墳群（無袖有段構造石室主体）などとの関係性については、今後の課題である。

本稿をなすにあたり、栃木県古墳勉強会の方々からご教示いただき、とくに秋元陽光氏からご意見を賜りました。末筆ながらお礼申し上げます。

[註]

(1)「框石」は玄門部における段構造をもつ場合に、「梱石」は段構造をもたない場合において使用する。

(2) 西方山４号墳は無袖有段構造の可能性がある。ただし、河原石の小口積みで構築されていること、奥壁が複数段で構成されていることなどから、伯仲１号墳との直接的な関係は見出しにくい。

(3) また、伯仲１号墳に隣接して山王寺大桝塚古墳が、永宝寺古墳に隣接して小曽根浅間山古墳が立地している。両者は、既存の古墳（前期古墳）を意識して造墓されている点においても共通性が認められる。

(4) 伯仲１号墳と永宝寺古墳はいずれも馬具が出土している。馬具は軍事的側面が強調されることが多いが、律令期の駅伝制を鑑みれば、馬の保有は交通体系の整備に深く関係している（松尾 2006）。なお、伯仲１号墳がのちの寒川郡域に近く、永宝寺古墳が梁田郡域に近いことがわかるが、いずれも小郡で、やや特異な立郡の契機が想定される。これらの関係性については今後検討していきたい。

[参考文献]

秋元陽光 2006「西方山古墳群における横穴式石室」『栃木・西方山古墳群』 駒沢大学考古学研究室

秋元陽光 2016「栃木県赤津川・永野川流域の古墳群」『群集墳展開の共通性と地域性―王権・地域首長と群集墳被葬者―』東北・関東前方後円墳研究会

足利市教育委員会 2004「永宝寺古墳第２次発掘調査」『平成 14 年度文化財保護年報』

池上　悟 1988「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第 88 号 立正大学文学部

市橋一郎 2010「下野」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』 雄山閣

市橋一郎 2014『北関東の横穴式石室』 同成社

大橋泰夫 1990「下野における古墳時代後期の動向―横穴式石室の分析を通して―」『古代』第 89 号　早稲田大学考古学会

小森哲也 2012「７. まとめ　栃木市岩出古墳測量調査報告」『栃木県考古学会誌』第 33 集　栃木県考古学会

小森哲也・中村享史 1989「栃木県における横穴式石室の受容」『東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会

齋藤　弘・中村享史 1992「足利市機神山古墳群の形成過程について」『研究紀要』第１号 （財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

栃木県古墳勉強会 2018「栃木市伯仲１号墳（長山古墳）調査報告１」『栃木県考古学会誌』第 39 集 栃木県考古学会

栃木県古墳勉強会 2019「栃木市伯仲１号墳（長山古墳）調査報告２」『栃木県考古学会誌』第 40 集　栃木県考古学会

中村享史 2003「栃木県における後期古墳の諸段階」『後期古墳の諸段階』 東北・関東前方後円墳研究会

藤村　翔 2016「中原４号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法中原古墳群』 富士市教育委員会

松尾昌彦 2008『古代東国地域史論』 雄山閣

紙幅の都合上、石室の報告書は割愛した。